



## 珈琲考

神戸大学 経済経営研究所

准教授 岩佐 和道

コーヒーが好きで毎日 2、3 回飲んでいる。大学の下宿時代からブラックで飲むようになった。その理由を表向きには、コーヒーフレッシュの購入や、混ぜたスプーンを洗うのが面倒だからと言いながら、実はブラックで飲む方がかっこいいのではないかと思ひ日々を過ごす間に、ブラック好きになった次第である。

ここ数年は近所にあるコーヒー店の豆が、その新鮮さと味わいの豊富さから非常に気に入っている。豆の種類ごとに農園の紹介があり、焙煎度合いで風味が全然違う。湯を注いだ際にふわっと膨らみ、その膨らみを壊さぬように湯を少量ずつ注いでいくのは、なかなか楽しいものである。目下のコーヒーブームに逆らい、挽き立てコーヒーを提供する気が全くない生協の代わりに、六甲台にも出店しないものかと夢想している。

このようにコーヒーを長年愛飲しているのだが、実は私は鼻炎気味でろくな嗅覚を持ち合わせていない可能性が高い。しかしながらコーヒーの魅力はその香りに尽きると、万人と同様に信じている。蛇足になるが、私の 2 人の子供たちも喜んで豆を挽きその香りを楽しんでいる。

ところが、コンビニや自販機で缶コーヒーを買おうとすると、少し困ったことになる。なぜなら、大半の缶コーヒー（ブラック）には、何と原材料としてコーヒー以外に香料が加えられているのである。

率直に言って、そんなのありかと思う。

私は食品を購入する際に、裏面の原材料表示を確認する習慣がある。もう何年も前になるが、そんな神経質な私の記憶が正しければ、最初にブラックコーヒーに香料を添加した商品を販売したのは、“桃の匂い水”が大ヒットした会社である（この会社は本業でも香りが重要であると思うのだが、香りに関してどう思っているのだろうか）。そしてその缶コーヒーは、（皮肉にもとれる）素晴らしいネーミングとともに大いに売れたのであろう。今でもコンビニ等でよく見かける。またその成功に引き付けられたのか、その他の缶コーヒーにも徐々に香料が加えられていったと記憶している（が、勘違いの可能性もあり）。

Wikipedia の「缶コーヒー」のページを参照すると、「コーヒーの香り自体が熱に対して非常に弱く揮発しやすい(特にロースト感の消失が著しい)デリケートなものであるため、製造時の熱処理が多い缶コーヒーにおいては、香料による補完の必要性が生じる」と述べられており、必要悪のような扱い方である。

しかし、一方で無香料にこだわった商品の販売を続ける会社も存在し、私としてはこちらを応援したい。ちなみに私のお勧めは、ダイドーのデミタスブラックであるが、この商

品をコンビニで買うことはほぼ不可能と思われる（ただしダイドーの自販機は意識して歩くと、思いのほか存在することに気づき驚く）。私の理想は、「無香料の缶コーヒーが、消費者の選択による競争を勝ち抜き、コンビニで気軽に購入できる状況」なのだが、現在の競争は、公平なものであろうか？

一般的な見解では、公平と答えて差し支えないと思うのだが、私のコラムなので好きなことを述べさせていただくと、答えはもちろん不公平である。

以下にその感情的な理由を述べる。

1. ブラックコーヒーに香料等の添加物（他には乳化剤やシリコーン）が加えられていることは、おそらく一般の消費者には認識されていない。
2. そのため無香料・無添加にこだわるメーカーは、それを消費者に伝えるためには缶に明示的に記載せねばならない。
3. 商品の前面に、“無香料”や“無添加”と記載することは、デザインの自由度を奪い、その商品に対して野暮ったいイメージを植え付けかねない。

結論：なぜ無香料で頑張っている会社の商品が、デザインやイメージの面で損をしないといけないのだ。香料を加えている商品の方が、缶の前面にでっかく“香料添加”と書かないといけないような規制のもとで、競争をするべきだ。

ここまで長々と述べてきたが、結局のところ私の考えをまとめると、「一般の消費者にとって想像が及ばない原料や製造法を使用した商品には、誰もが一目で認識できるような表示を義務付け、そのもとで消費者の選択に委ねるべきだ」ということである。シグナルを送るべき真の当事者は、従来の製法を維持する側ではなく、新たな製法を使用した側であるはずだ。

さて、このような規制が実施されたとして、消費者の効用は増大するであろうか？

残念ながら否であろう。自分の弁当にハエがとまっていたことなど知りたいものか。